

東京バツハ合唱団 月報

[第 513 号] 2005 年 3 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky3Web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.513

March 2005

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

カルヴァン、そしてその後

森井 眞(団友)

人間は死に向かって投げ出された存在であり、そのすべての営みは虚無に呑みこまれてゆく。そんな人間にとって最も重要と思われる二つの問題を、カルヴァンにふれるまえに取り上げてみたい。

一つは、人間の相対化であり、絶対ならざるものを絶対化しないことである。

人間は相対的存在でありながら、つい自分や自分の考えや情念を絶対化する。それは危険で不幸なことである。昔から、宗教は人間を絶対者のまえに立たせて自分を相対化させた。ただ、相対者である人間は絶対者を把握し理解・表現することは不可能であり、かつて宗教が作られたころには絶対者は神話的に表現されることが多かったが、近代化が進むにつれて人々はその表現になじまなくなり、脱宗教化・非宗教化が確実に進む。絶対者は「絶対無」とでもいうほかなく、せめて無限の宇宙、無限の時の流れ、生命のふしぎ、などを思うばかりである。

ある統計では、今や「宗教を信じている」と答える人が、カトリック教団と思われているフランスでさえ 11%だという。フランスのみならず、ヨーロッパのキリスト教先進国はみな似たようなものであり、私たちは今そんな世界の状況にあることを忘れてはならない。人間の相対化をどうするか。絶対者に対する相対者、と人間をとらえるより、全体に対する部分、と考えるように人類は動いているのかもしれない。

二つ目は、人間の尊厳を認めること。

人間は人種、国籍、性、障害の有無、年齢、能力、地位その他のちがいに関係なく、ひとりひとりがそれぞれ掛替えない貴い人生を生きており、その尊厳は決して侵したり奪ったりしてはならないという考え。それは思想というより信仰に近い、というべきだろうか。教義をもった宗教を信じるのではないが、たとえば仏教ですべての人が仏性を、キリスト教では神の像を、宿しているという、そんな人間の尊さに気づきそれが見えてくることであり、ことばで理解するより自分の人生を生きてそれに気づくことであろう。人間の尊厳に気づきそれが見えてくることを、人間が「大人になる」、「市民になる」というのかもしれない。

以上二つのことを頭において、必ずしもそれに捕らわれず人間の問題を考えてみたい。

カルヴァン(1509-1564)は人間の虚無を見つめ、人生は迷路と深淵だ、と嘆いた。いくら出口を求めても、出口は見つからず、淵はかぎりなく深い。その迷路と深淵から脱しようにも人間は自分の力で脱することはできないのだ。カルヴァンは、神による人間の価値のまったき否定をと

して人間が相対化され新しくされる道を選んだ。そして「人生の目的」は「神を知ること」だという。ただし「知る」とは知的にでなく、愛すべきもの、仕えるべきもの、として神を知ることであり、人はだれでも自分の幸福を求めて生きているが、まず神の栄光を求めて生きるとき、はじめて人間は幸せになるのだという。カルヴァンのモットーとしてあまりにも有名な「ただ神に栄光」または「ただ神の栄光」である。

しかし「神の栄光をあらわす」とはどうすることだろうか。讃美の歌をうたうことか。舞いを奉納することか。信徒をふやすことか。自分たちの神を信じない異教徒を滅ぼすことか。

カルヴァンには迷う余地がなかった。かれにとって「宗教改革」はほとんど神自身の仕業だった。ローマ教会の手でキリスト教が歪められたとき、教会を本来の姿にもどそうと立ち上がった宗教改革者のうしろには神の手があった。こうして生まれた福音主義の教会を、教皇らはあろうことが異端の巢として地上から払拭しようとかかっているのだ。「神の栄光」といえば、まず何よりも真の教会を守り、福音の運動の「前進と拡張」につくすこと以外ではありえないだろう。そして人間に福音をあてた神の愛にこたえて人間がおのれの完成にむかって歩きつづけることである。ところでカルヴァンは幼少時からギリシャ、ローマの古典を学んで、人間が人間らしくあることを問い求めてきた。かれは「ただ神に栄光」と呼びながら、しかしこの「人間らしくある」ことを人間にとって最も大切な課題として生涯問いつづけたのである。

さて、カルヴァンのあとにくる人々のことを思いつづけてみよう。

カルヴァンを師と仰いで尊敬したカルヴィニストたちの多くは、「ただ神に栄光」に深く感動した。ほんらい虚しさの影をやどす人生を生きる目標がはっきり示されたからである。そして神のために勤勉に働き、労働の収益も自分の欲望充足のためでなく神の栄光のために、と再生産に注いで、資本主義経済の発展に大いに貢献した、といわれる。ただ、生きることの貴さを大切にし、人間らしさを求めようとの想いが鮮明でないとき、「神」にせよ「お国」にせよ「何かのため」に生きることに専念すると、とかく人間不在におちいり人間の歪みを生じかねない。たとえば、カルヴァンの流れをくむピューリタンのある人々は、自己を抑制して神の栄光を求めるのに熱心なあまり、不自然な禁欲主義におちいり、ピューリタン革命ではあつちの明るく楽しかったシェイクスピアのイングランドを、一夜にして灰色の

国に変え、イギリス人の国民性に偽善の種を植えた、といわれる。カルヴァンは禁欲主義者ではなかった。神の賜物は感謝して享受し、節制と他者への配慮とを大切にしながら、自分の身分なりにこの世の富を楽しめばよい、と考えていた。それが人間らしいことではなからうか。

ブッシュを担いだ宗教熱心なアメリカ人の多くもカルヴァンの流れに近いと見てよいだろう。ブッシュは9.11の報復戦争を、つい「十字軍だ！」と口走ったが、かれの無法な戦争を支持する人たちはアフガンやイラクで数知れぬ無辜の民を殺しながら、異教徒を倒し神の栄光をあらわした、と喜んでいたのである。

パスカル(1623-1662)、カルヴァンより1世紀あまり後に生きたパスカルは「人間の営みはいちいち分類する必要はない。すべて気晴らしである」といった。人間は究極の問題を見つめつづけたらとても生きていられないのだ。パスカルは人間が気晴らしに生きることを肯定せず、気晴らしではなく本質的な問題を避けずに問うことを求めた。しかし時代はもうカルヴァンのころのように神の存在が自明のことではなくなっていた。来世があるかないかも誰にもわからない。それは賭けである。在るほうに賭けてもし在れば大もうけ。無くて損はないが、無いほうに賭けてもし在ったらこれは大変である。神も同じことだ。「この無限の宇宙は私を沈黙せしめる」とかれはいう。人は無限の宇宙をまえに神を思うのだ。それとともに、「自然の中のもっとも弱い一本の葦にすぎない」人間の「考える」という精神の働きに、パスカルは奪うべからざる人間の尊厳を認めている。

カント(1724-1804)、パスカルよりも1世紀あとのカントもまた「星をちりばめた無限の大空」と人間のうちなる「道徳律」とに絶対者と人間の尊厳を思っている。

しかし現代人ヴァレリー(1871-1945)は「この無限の宇宙は私を沈黙せしめる」というパスカルのせりふには人間を神に導こうとする卑しい魂胆があると軽蔑し、「私は宇宙をまえにしても沈黙しない」と敢えていうことになる。

マルクス(1818-1883)、カントよりさらに1世紀近く遅れるマルクスは「神は死んだ」という。しかし、自ら神のごとき独裁者となって上から人民を支配し、一国社会主義を唱えたスターリン(1879-1953)とは全く異なって、マルクスは生産手段の私有化による人間疎外を、全人民の意志が実現される社会をつくることによって克服し、人類が主体となって人間性を回復することを願った。歴史がマルクスの考えたように展開するかどうか私にはわからないが、人類が人間を解放する営みを、個々の人民が他人事とせず自らその営みに連なって生きることを説くマルクスの問題意識は重要であろう。

ニーチェ(1844-1900)、マルクスより少しあとのニーチェも「神は死んだ」という。両親とも牧師の子で父も牧師だったが、キリスト教の道徳は奴隷の道徳だといひ、人間は自分の意志で人間を超えなければならない、と「超人」を説いた。これも強烈な問題提起であるがニーチェ自身は発狂して終った。

デュルケーム(1858-1917)、さらに少しあとのフランスの社会学者デュルケームは「神とは社会である」といった。人間の住む地球は広大な宇宙の極小部分にすぎず、人間の

社会はさらにその部分である。しかしひとりの人間にとって「社会」は全体である。かつては個人にとって「国」が全体だった。しかし地球規模化の現代、国は全体でなく部分である。個人にとって全体は人類であり、神を信じる者にも信じない者にも、人類が一種の全体である。

さて現在、日進月歩の技術革新はどこまで行きつくのか予想もできないほど凄まじく、究極兵器といわれる核兵器がさらに改良され、大量破壊兵器によって人間が人類を全滅させ地球を崩壊させるおそれは決して小さくない。また文明による自然環境破壊も確実に進んでそれも人類の破局を招きかねない。人類はいま存亡の危機に立たされている。しかしまた、人間の尊厳に目覚め、それを、いかなる経済的利益、政治的覇権、快適さ、便利さ、快樂にもまして重んじようとする人々、尊厳を脅かす強大な力に立ち向かって毅然として闘おうとする人々も、地球の全域にわたって確実にふえているのだ。死刑制度廃止にふみきったヨーロッパ先進国の決断をみよ。アメリカのイラク侵略戦争を防ごうと全地球をおおった市民の圧倒的な反戦デモをみよ。各国政府の働きを越えてじつにさまざまな分野で展開されている多種多様なNGOの善意の活動をみよ。

人間の愚かさ、傲慢、欲望の強さなどが人類を滅亡に追いこみかねない今、その力と闘って人間の尊厳をまもることは、まさに人類の緊急な義務であると同時に、じつはそれこそ人類の本当の意志なのだ。そんな人類の意志を自分の意志として抱き、そのために闘う人たちと連帯し、その運動の「前進と拡張」のために尽くすことが、私たちを真に人間として生かす道なのではなからうか。私にはそれがカルヴァンを受け継ぐことのように思えてくる。

筆者は歴史家(フランス宗教改革史)・明治学院大学名誉教授。

当稿は、筆者が参画している「人間を考える会」での講演(2005年1月15日)をもとに加筆訂正していただいたものです。

近著『ジャン・カルヴァン ある運命』で、長年にわたる研究のご成果を世に問われます(2月15日、教文館発行。四六判上製・410ページ、定価3465円)。

3頁の<譜例1>

Sopran

16(121)

Ge - lo - ta - ta

ほ - め - た - た

主題動機 (6度上行)

- - bet - sei der Herr,

え - よ 主 を

<譜例2>

Alt

24

Ge - lo - bet sei - der Herr,

ほ め た た え よ

カンタータ第 129 番《ほめ讃えよ 主を》
„Gelobet sei der Herr, mein Gott“ BWV129

解説: 大村恵美子

初演: 1726 年または 1727 年の三位一体節、あるいは 1726 年の宗教改革記念日 (10 月 31 日), ライプツィヒ。

コラール 1 曲の全詩節をそのまま歌詞として用いたカンタータを厳格なコラール・カンタータというが、今回の演奏会前半で紹介する BWV129、BWV137 の 2 曲はこの種類に属する。バッハのカンタータの中で残されているこの種のカンタータは次の 10 曲で、いずれもバッハが愛し、また全詩節をとおして、いわば変奏曲として構成するにふさわしいと考えられた旋律構造のコラールを基本として用いている。

- BWV 4 《キリスト 死に繋がれしが》(1708 前)
- BWV97 《わがすべての業 主に導かる》(1734)
- BWV100 《神の御業こそ ことごと善けれ》(1734?)
- BWV107 《なんぞ悲しむや おお わが心》(1724)
- BWV112 《主はわが頼める まことの牧人》(1731)
- BWV117 《み栄えあれかし 恵みのみ父に》(1728-31)
- BWV129 《ほめ讃えよ 主を》(1726/27)**
- BWV137 《ほめよ主を 強き栄えの君を》(1725)**
- BWV177 《呼びまつる イエスよ》(1732)
- BWV192 《ああ 感謝せん 神に》(1730)

この BWV129 の基本コラールは、J. オレアリーウスの「ほめ讃えよ 主を」Johann Olearius „Gelobet sei der Herr, mein Gott“(1665) で、どの曲も、コラール各節の初行「ほめ讃えよ 主を」の歌詞で始められる。最終節になってはじめて「聖なるかな 喜び歌わん」と変わる。前年に作曲された BWV137 と共通点が多いが、楽器編成は、トランペット 3、ティンパニのほか、オーボエ 2 にフルートとオーボエ・ダモレも加わって、BWV137 よりもいっそう色どり鮮やかなものとなっている。

ヨハネ 3: 1-15 の、神の国についてのイエスとニコデモの対話という、この日の福音書章句も、直接歌詞にとり入れられず、むしろ父・子・聖霊の神への普遍的な讃美が内容となっている。

全体は、1. 合唱と 5. コラールの枠のなかに、レチタティーヴォを 1 曲も介さず、アリアを 3 曲 (2. パス, 3. ソプラノ, 4. アルト) つづけて入れるという、明解な構造をとって、ひたすら同一コラールの讃美を変奏してゆく。

1. 合唱 [コラール第 1 節]

基本コラールの第 1 節 (旋律は J. ヘルマン「おお神よ、なんじ義なる神よ」Johann Heermann „O Gott, du frommer Gott“ 1630)。

トランペット 3、ティンパニ、フルート、オーボエ 2、弦合奏、通奏低音による前・間・後奏の華やかな器楽にのって、各行ごとに独自の変奏をほどこされたコラールが、楽しげに元気よく歌われる。

2. アリア [コラール第 2 節] (バス)

ここからアリアが 3 曲、バス、ソプラノ、アルトの順に歌いつがれる。冒頭合唱の父なる神の讃美に対して、ここでは子なるイエスの讃美となる。通奏低音のみの器楽で、パスピエ風のはずむような 8 分の 3 拍子に貫かれ、バス独唱も、旋律的・リズム的に動きのはげしい歌で、イエスの十字架による愛を生き生きと印象づける。

3. アリア [コラール第 3 節] (ソプラノ)

ホ短調、4 分の 4 拍子の、しっとりとした調子になり、フルートとヴァイオリン独奏のオブリガートを伴ったソプラノが歌いだが、その場合ソプラノでは、冒頭に器楽で明示される 6 度上行 (h-g) の主題動機のまゝに、2 小節ほど、口ごもるような導入が加わる (譜例 1)。父子の愛をわれわれに働きかける、慰めと力づけの聖霊を讃美するときの、心のゆらめきを表わすようである。

4. アリア [コラール第 4 節] (アルト)

第 1 行のフレーズを、第 6 音にむかって上行してゆく基本コラールの旋律に準じて、2. ソプラノ・アリアが 6 度上行の主題動機ではじまり、さらにこの 4. アルト・アリアでも、8 分の 6 拍子のリズムで、4 度のアウフタクトから 6 度の連続上行音程で歌い出す (d g-a-h-h-c-d-e. 譜例 2)。「ほめたたえよ」のリフレインが、いつも上昇の勢いをともなって登場するのである。

オーボエ・ダモレ (愛のオーボエ) がアルトと歌い交わして、三位一体の神を讃美する、のびやかなパストラレ仕立てである。

5. コラール [コラール第 5 節]

コラール最終節が、4 声体で各行ごとに歌いきりながら示され、前・間・後奏の器楽トゥッティは、冒頭合唱曲よりもさらに明確な、行進曲風のリズムを刻んで、高らかに全曲の最後をかざる。

楽器を豊富にもちいて、最大規模のカンタータとなっているが、(三位一体節という指定にこだわらず) 教会のあらゆる記念行事に効果的であるような、普遍的な神讃美の音楽として応用することができよう。

□ 新刊紹介 □

高柳富夫著

『いま、聖書を読む ジェンダーによる偏見と原理主義の克服をめざして』(2004 年 12 月、梨の木舎)

大村恵美子

偶然にも、中野桃園教会牧師をしておられる著者の新著を、その教会の会員から合唱団員という経路で、早々にご恵贈いただきました。高柳氏は、1992 年にアメリカに留学されるまで、川崎の三田教会を牧され、その頃に何度かお会いすることがありました。

この新著は、「一つの価値観をおしつけ、自由な批判精神を摘みとる 原理主義克服のために、原初史 [創世記 1 章 ~ 11 章] に託された真のメッセージはなにかを問う」とあって、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教等全ての中の原理主義、また日の丸、君が代をものすごい勢いで強制する日本の国体原理主義など、現代に荒れ狂う人類の悪を、意表をつくほどの率直さで指摘しています。

恵泉女学園大学における 5 回の公開講座が基礎になって

いることで、深い学問的裏づけからなる明解な論理の展開を、親しみやすい口調で語られ、一冊の本としても、みごとに読みごたえのあるものです。新鮮な関心をもって、一気に読ませていただきました。

<むすび>の中で、私たちが《マタイ受難曲》演奏にあたって、とくに関心のある、イエスの十字架刑の意義を、「イエスの闘い」と題して述べられた箇所から、半分ほどご紹介しておきましょう。

十字架による処刑は、イエスがユダヤ教原理主義と闘った結果なのであって、全人類の罪のゆるしのための普遍的な贖罪の出来事というよりは、むしろ原理主義的権力志向とその抑圧の下で疎外された真実の人間性を回復し解放するための対決がもたらした結果であったのです。もちろん、それは人間性の回復という問題に留まらず、ユダヤ教原理主義の神理解とイエスの神理解との衝突であったということです。その結果、イエスは当時の政治状況のもとで、ユダヤ教原理主義者たちの策略により、ローマに対する反逆者として訴えられ、ローマの極刑である十字架刑に処せられていったのです。

イエスの十字架の死は、イエスの生き方の結果であり、ユダヤ教原理主義の条件づけられた贖罪信仰と徹底的に対決した結果もたらされたものであったのです。にもかかわらず、初期キリスト教は贖罪信仰と闘ったはずのイエスの死を、贖罪のための死であると解釈してしまいました。そうすることによって、イエスの十字架の死は、それを贖罪の死と信じる者のみが救われるという、キリスト教徒の救済の根拠にされたのです。

このことは、ユダヤ人を中心とする初期キリスト教徒が、結局のところユダヤ教原理主義の枠組みから出ることができず、イエスの言葉と振る舞いに直接に接したにもかかわらず、ユダヤ教原理主義の神理解を克服することができなかったことを示しています。同時にまた、イエスの十字架の死を贖罪の死として信ずる者にのみ救いがあるというキリスト教原理主義への道を開いたことを示しているのです。